

建設省土木研究所 ○小笠原 久, 正員 佐々木 康, 正員 各口 実一

## 1. まえがき

道路交通振動の距離減衰について筆者等が行なって至る研究結果の一つとして、基準長(外側車線中央から道路直角方向に5mの地表)の振動レベルが高いため、振動の距離減衰が大きくなる傾向が見られた。この結果につれての土力学的考察だけを得るために、ここでは起振機を振源とする現場実験を行なうと共に、その現場の地盤から採取した不擾乱試料を用いて、共振法土質試験により土の動的变形係数を求めた。以下に両者の結果を比較し、微小差異にあける地盤振動の距離減衰について考察を加える。

## 2. 実験方法

## 2.1 千葉県市川市における現場振動実験

千葉県市川市の平坦な空地において起振機による地盤振動実験を行なった。現場は埋立地であり、図-1に示すように厚さ2mの埋土があり、深さ約1mまで軟弱なシルト質粘土層がある。表-1に示すように振動数と加振力を変化させて、37ケースの振動実験を行なった。地盤振動の測定方法は図-2に示すように、コンクリートブロック上に起振機を固定し、測定はブロック中央から40m地表までは1m毎に40点、25mから60m、80m地表にそれぞれ5点ずつ計40点の公害用振動計を設置し、計40点の地盤振動の鉛直加速度を測定した。また40mまでは奇数番目(1, 3, 5, ..., 39m)と、偶数番目(2, 4, 6, ..., 40m)を2回に分けて測定した。

## 2.2 実験結果および考察

図-3は起振振動数を10.48とし、起振力を変化させて場所の距離減衰の一例であり、起振力が大きくなるほど(基礎長の加速度が大きい)距離減衰が大きくなる傾向が見らる。得られたデータを次式に式(1)近似し、距離減衰係数mを計算した。

$$A = A_1 (r_1 / r)^n \exp\{-\alpha(r - r_1)\} \quad (1)$$

ここに  $A$ : 振動源より距離  $r$  の時の加速度  $n$ : 定数

$$A_1: " " \quad \alpha: 距離減衰係数$$

観測されたデータは伝播速度、運動粘度、地中分布等の実験から Rayleigh-  
eighn 等であると考えられるので、 $n = 1/2$ とした。また  $\alpha$  は一般  
に次のように表わされる。

$$\alpha = R \cdot \omega / U \quad (2)$$

$$R: 減衰比 \quad U: 伝播速度 \quad \omega: 円振動数$$

さらに地盤振動の減衰比は次のようにならざる。

$$\gamma = U / V \quad (3)$$

$$V: 厚実の速度$$

これらの関係式より求めた5m地表の減衰比、U、 $\omega$ を示したものが表-1、また図-4、加振点

5mには振源より5m地表の減衰比、 $\gamma$ の関係を示す。

図-4, 5に示す

深度 (m)	地質名	地盤
2	埋土	
4	シルト質 粘土	
6	シルト質 粘土	
8	砂質 粘土	
10	細砂	
12	砂質 粘土	
14	砂質 粘土	

図-1 土質柱状図

表-1 起振条件等

frequency (Hz)	applied force (tonf)	$\alpha$		U (1/m)	shear strain at 5m (%)	h (m)	
		r <sub>1</sub> is not fixed	r <sub>1</sub> is fixed at 5m			r <sub>2</sub> is not fixed	r <sub>2</sub> is fixed at 5m
0.238	0.009	0.002	98	$3.54 \times 10^{-6}$	2.8	1.3	
0.187	0.007	-0.006	"	$2.76 \times 10^{-6}$	2.2	-	
0.099	-0.001	-0.018	"	$1.29 \times 10^{-6}$	-	-	
0.051	-0.010	-0.007	"	$1.04 \times 10^{-6}$	-	-	
0.025	-0.019	-0.023	"	$6.78 \times 10^{-7}$	-	-	
0.536	0.002	-0.001	80	$9.30 \times 10^{-6}$	0.3	-	
0.327	0.001	-0.001	"	$5.63 \times 10^{-6}$	0.2	-	
0.114	-0.008	-0.001	"	$2.02 \times 10^{-6}$	-	-	
0.057	-0.018	-0.007	"	$1.17 \times 10^{-6}$	-	-	
0.023	-0.018	-0.021	"	$5.32 \times 10^{-7}$	-	-	
0.953	0.012	0.011	76	$2.11 \times 10^{-6}$	1.5	1.3	
0.748	0.008	0.011	"	$1.65 \times 10^{-6}$	1.0	1.3	
0.398	0.009	0.020	"	$8.28 \times 10^{-6}$	1.1	2.4	
0.202	0.008	0.011	"	$4.32 \times 10^{-6}$	1.0	1.3	
0.101	0.006	0.009	"	$2.16 \times 10^{-6}$	0.7	1.1	
0.041	0.006	0.007	"	$9.15 \times 10^{-7}$	0.7	0.5	
0.010	-0.007	-0.009	"	$3.71 \times 10^{-7}$	-	-	
0.980	0.027	0.049	84	$3.03 \times 10^{-6}$	2.4	4.4	
0.677	0.022	0.044	"	$1.95 \times 10^{-6}$	2.0	3.9	
0.454	0.022	0.046	"	$1.25 \times 10^{-6}$	2.0	4.1	
0.274	0.023	0.050	"	$7.19 \times 10^{-6}$	2.0	4.5	
0.183	0.025	0.049	"	$4.71 \times 10^{-6}$	2.2	4.4	
0.046	0.019	0.042	"	$2.28 \times 10^{-6}$	1.7	3.7	
2.330	0.035	0.026	85	$3.57 \times 10^{-6}$	2.3	1.7	
0.808	0.031	0.021	84	$1.70 \times 10^{-6}$	2.1	2.1	
0.647	0.030	0.031	"	$1.31 \times 10^{-6}$	2.0	2.1	
0.486	0.032	0.031	"	$9.85 \times 10^{-7}$	2.1	2.1	
0.324	0.030	0.032	"	$6.66 \times 10^{-6}$	2.0	2.1	
0.162	0.028	0.035	"	$3.31 \times 10^{-6}$	1.9	2.3	
0.081	0.031	0.035	"	$1.90 \times 10^{-6}$	2.1	2.3	
0.041	0.030	0.036	85	$1.43 \times 10^{-6}$	2.0	2.4	
0.912	0.045	0.042	92	$9.76 \times 10^{-6}$	2.2	2.0	
0.700	0.048	0.039	"	$8.60 \times 10^{-6}$	2.3	1.9	
0.548	0.047	0.031	"	$6.29 \times 10^{-6}$	2.3	1.5	
0.385	0.046	0.030	"	$4.59 \times 10^{-6}$	2.2	1.5	
0.183	0.048	0.024	"	$2.72 \times 10^{-6}$	2.3	1.2	
0.091	0.046	0.022	"	$1.67 \times 10^{-6}$	2.2	1.1	

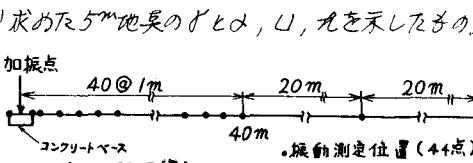


図-2 加振点及び振動測定位置

5m地表の歪が増加するほど、それは増大する傾向が見らる。従って加速度が大きい振動の方が、距離減衰が大きくなる原因として、土の減衰比の差依存性を有していることか考えらる。しかし伝播速度については、10Hzの時のS波最大値は小さくなっている。

### 2.3 芝振法工實試験

芝振ゆじり試験機を用いて、現場振動実験を行なった地盤の不規則乱粒性土の減衰比を測定した。試料は図-1に示す採取位置のシルト質粘土である。試料に載荷する拘束圧はすべての試料で同一とし、 $\delta_c/10^{-6} \sim 10^{-4}$  の範囲の力を、自由振動記録より求めた。

### 2.4 実験結果

図-4に実験より得られた減衰比と、せん断歪の関係を示す。図-4より $\delta_c/10^{-6} \sim 10^{-4}$  の範囲では、 $\delta_c$ の増加に伴って歪が増加する傾向が見らる。ここで得られたデータは拘束圧が零の条件下のものであり、また歪のレベルについても、振動実験におけるRayleigh波が伝播する地表面の状態に対するものである。従って図-5、6と比較すると、加速度の大きい振動の方が、距離減衰が大きい原因が土の減衰比の差依存性にあることか室内実験の結果からも裏付けられることになる。また土の減衰比は拘束圧の影響を受けて大きく、拘束圧が下くほどその値は載り、歪の増加に伴うその増加が少なくなる。又、図-5と図-6との $\delta_c$ の絶対値はあまり一致してないが、この原因としては拘束圧の影響が最も大きいと考えらる。

(参考文献) 佐々木康他、"地盤振動の距離減衰に関する調査"、第14回土工学研究発表会、1979

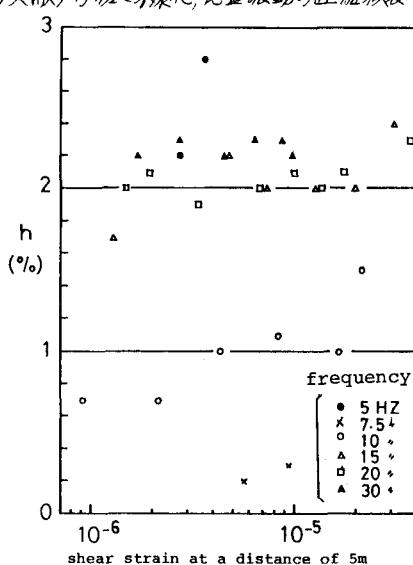


図-5 せん断歪と減衰比の関係(現場振動実験)

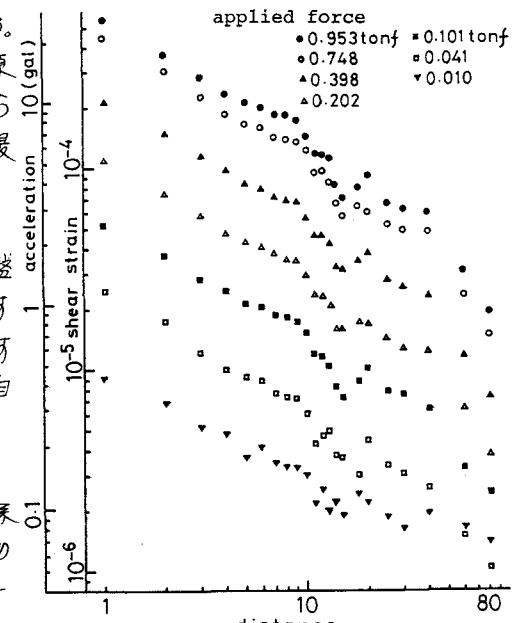


図-3 距離減衰(10Hz)

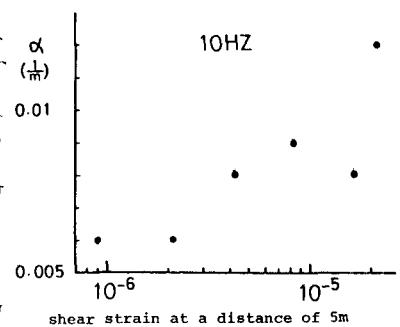


図-4 せん断歪と距離減衰係数の関係

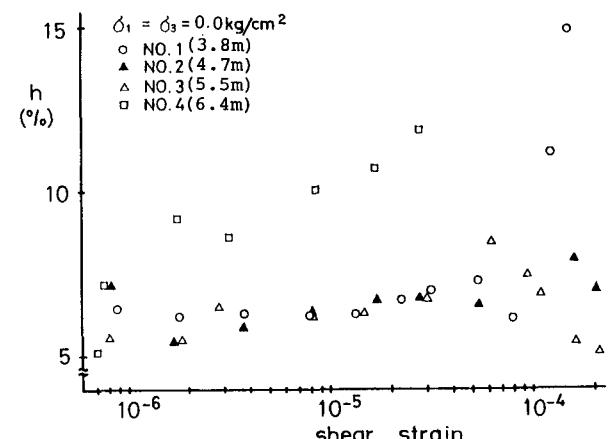


図-6 せん断歪と減衰比の関係(芝振法)